

NPO地域資料デジタル化研究会定例勉強会 2006年12月 常徳寺例会レポート



「デジタルで伝えよう、固有の文化、人の心」 ～ 前川先生を囲んで市民参加型のアーカイブ構築を考える～

日時：2006年12月16日(土)午後3時～6時
会場：山梨県笛吹市石和町 常徳寺客殿(デジ研本部)

NPO 地域資料デジタル化研究会 小林是綱理事長 あいさつ

私ごとだが、父の法事で、富士フィルムで作った8ミリ映画でとった父の映像をだしてきて見ていただいた。ところが回しているうちにランプが切れて一巻の終わりになってしまった。もうランプが手にはいらないので見るができなくなってしまった。

アーカイブを進めるには歴史の基本を理解しながら、さらにその変換装置をつねに考慮する必要を痛感した。

この壁に掛かっている版画は明治40年の水害で流れた常徳寺の前の姿を描いたもので、この版画が作られてその3年後に寺は流れてしまい、今はない。しかし版画を作ったことにより、その姿が100年後に残った。

今日は拡大的な勉強会で、デジタル化で何に気をつけて、どういう歴史観で取り組むかも大事で、しっかり学んでいきたい。このあとの忘年会も参加していただいて討議をふかめたい

前川先生の講演要約録

「デジタルで伝えよう、固有の文化、人の心」

前川道博(まえかわ・みちひろ)さん

・長野大学産業情報学科助教授(企業情報学部准教授就任予定2007/4～) / 専門:メディア環境学
・自己開発支援系メディアの開発、メディアを活用した地域づくり、学習支援に関心がある。Webサイト自動生成エンジンPopCorn、エンドユーザ向け入力インタフェースPushCornなどを開発。「かすみがうら*ネット」「やまがたネット」などeコミュニティ形成を支援。

研究室の URL <http://www.mmdb.net/mlab/index.html>

< デジタルアーカイブにいつからかかわったか >

生涯学習の分野ではデジ研の小林さんともネットワーク協議会で一緒させていただいた。そのときは山形県にいた。ネットワーク協議会の大会に参加して1セッションをコーディネートした。大学(東

北芸術工科大学)で「楽しく協働学習」というテーマで、プッシュコーンによるモデル学習の取り組みを始めた。2002年のことだった。

それから今もなお直面している問題は、生涯学習の分野でデジタルアーカイブが盛り上がらないこと。なにをやっても効果がない。種まきの芽がなかなか出ない。

今日は、デジタルアーカイブを社会的な事業として、生きている証として、個人的なものとしてとらえてみたい。いろんなことをやってそれを思うようになった。

私のやったものを振り返ると、eメディア研究会でメーリングリストでやりとりしている。この研究会では、ポップコーンを使って何かしようという目的もあるが、教育支援、地域活動の中で情報共有がどう役に立つのかを考えてきた。

ポップコーンは作ってから10年経った。その間に自分も変わってきた。それ以前の道具立てでは生産性が低かった。ポップコーンを作ってから、これで人に見せたい、手元にあるデジタルデータをどんどん出したい、というようにその要求が劇的に変わってきた。

最初に97年の「マッピング霞ヶ浦*」の取り組みがある。10年経ったが、個人的には浦島太郎の心境。97年に始めたときには、ホームページの中で、アーカイブという発想がない時代だった。人に見せるためという目的もあったが、自分の記録という目的もあった。

最初の記録は、自分が生まれ育った霞ヶ浦の記録だった。最初はビデオを撮り、その静止画を取り込んで載せていった。登録日で見ると、ここ1年くらいは不本意ながら中断しているものの10年の記録が蓄積できた。さかのぼって97年1月が原点。そのねらいは地域発見のためのマルチメディア・データベースだった。

そのあとに、1人ひとりの蓄積した学習素材をポートフォリオにまとめる支援をした。「eポートフォリオ」は、5万件、10万件のデータをかさばらずに保存できることが特色。ただ、概念的には理解してもらいにくいのが現状。

<「マッピング霞ヶ浦*」の意味>

霞ヶ浦を見て回って、まず自分の視点で表現することに、面白くてはまってしまっている。いろんなものをカメラで記録する。ビデオを回し放して撮り、あとでみると発見がある。学習効果が高い。それがモチベーションとなった。これは、古いものが失われてしまうから記録するという発想とは別にある。

「マッピング霞ヶ浦*」を公開したあと、いろいろ参考になると、反応する人がちらほらと現れた。

今はブログが出てきた。ブログは日記の性格が強い。これに対して、「霞ヶ浦」は、その時に見たものを何でもかんでも放り込んで保存している。そこが説明しがたいアーカイブの性格である。

「マッピング霞ヶ浦*」は地域社会をここに投影するもの。地域をネットに移植する空間であり、5年、10年と続くことで、時系列ができ、現実より構造化されたものが蓄積される。10年間私が見聞したものが全て蓄積されている。そのときに私が見たものが歴史に転じている。

参考URL 「マッピング霞ヶ浦*」

<http://www.kasumigaura.net/mapping/>

<昔だけでなく、今のものの記録も大事>

山形で暮らしていたときには「マッピング山形」はしなかったが、山形で撮ったものもあげたいとは思っている。これに対し、霞ヶ浦は、生まれたところであり、日頃暮らしているところではなく、たまに帰るところ。Webサイトでアーカイブを作ることが、実家に帰る動機にもなってきた。それが時代を記録したアーカイブになっている。

過去をアーカイブすることも大事だが、今をアーカイブすることも大事。過去は価値が認識されているが、今はまだ価値が認識されていない。

自分がかかわったという個人的な記録である。ポップコーンでいろいろやってきたが、それに感じる方ができてきた。そこから市民参加型ネットの「かすみがうら*ネット」がひろがった。

特にアクティブな方が二人いる。その一人の鈴木さんという方は植物、自然に関心があり、記録を撮っている。昔の写真も人に見せられる。社会的な財産にもなる。個人資産ではなく、社会の共有資産になるということで、鈴木さんは67歳だが、これをやって健康にもなられた。始めて3年で、既にアーカイブは数千枚になっている。

日記の感覚で毎日続けていける。それが貴重な記録になっている。デジタルアーカイブでは、個人的、社会的の境目がない。自分の内部の興味が原点である。

参考URL 「かすみがうら*ネット」

<http://www.kasumigaura.net/>

<手塚さんの個人史とマルチメディア>

今年から「マルチメディア自分史」の取り組みを始めた。

お年寄りの癒しの研究というテーマで、マルチメディアでお年寄りの支援ができないかという課題に取り組んでいる。手塚さんは最初の被験者。子供の頃からの思い出をハイビジョンで数時間収録した。(ここで動画を視聴)

私個人も興味深いのは、手塚さんの話を通して地域の歴史が垣間見えてくること。手塚さんが、戦争をはさんで、尋常小学校から蚕業学校に入り、新しい学制が始まって高等学校になった。戦争中、上田の飛行場を米軍が爆撃したなどの生々しい話、子供のころのいじめの話などをインタビューして映像にし、また自分の持っていた写真を整理した。

上田は戦前戦後でがらっと変わった。その当時の地域の歴史の背景などを構成しながら、トピックスごとにビデオクリップに整理し、オンデマンドで見られるようにした。



マルチメディアの素材に自分で取り組んでみて、この作業をして、他の方にも勧められるか、その検証に取り組んだ。問題はどうかやればいいのか、他の方がやる場合にどういう壁があるか。

その結果、クリップは編集作業なので、大変な仕事である。切り刻みの編集作業であることが分かった。さらに問題は、話の聞き出し方、インタビュー技術。相手から何を引き出すか、全体の構成のイメージがないと聞けない。引き出しの技術、撮影の技術、編集の技術、ファイルの容量、速さなど。学生にもやらせたが、かなりやらないと習得できない。私自身も難しさを感じている。

この自分史を公民館の事業にすることを考えたが、実際には、コーディネーターのあり方が重要で、インタビューをする人の養成、ビデオの編集技術などの研修が必要。公民館では、できそうできないということが、今年やってみての壁だった。

自分史は、その人の生き甲斐を引き出す事業にもなる。公民館事業としての可能性もなくはないが、誰がやるかを考えてみると、高齢者福祉の施設職員が聞く、福祉事業の中でのモデルが社会的に普及するのではないか。マルチメディア自分史は、お年寄りに話を聞くことを福祉事業のなかでやると可能性が高まる。

<公民館のイベント記録>

一方で、公民館のイベントを映像で記録し、学習教材として活用することは大切。これはできそうなのに、どこの公民館でもいままでやってこなかった。

私の研究室ホームページからリンクしている「塩田平健康ウォーク」は、中世の古いお寺があり「信州の鎌倉」といわれる塩田平をウォーキングして地域のよさを感じる企画。長野大学の学生が主体になってイベントの様子を記録し、コンテンツをブログに出し、プッシュコーンであげた映像にリンクして

ビデオ公開している。映像は、ウォーキングで郷土史研究家の宮本さんが行った解説を要所要所でハイビジョンで撮影した。公開映像は856×480を使っている。ネットに出すには大きいけど、最近のブロードバンドの環境では、これくらいないと満足が得られない。映像配信にはそこそこの大きさが必要。

「塩田平健康ウォーク」の例では全体を編集しないテクニックを使った。つまみぐいで見られるようにするやり方で、編集しないでそのまま、ブツ切りにして見せている。これは前々からやっている”モジュールコンテンツ”の考え方で、要所要所で話したものをそのまま断片で見せる。1つが数分で、これを束ねると全体が構成でき、40～50分のビデオオンデマンドの編集作業が簡単にできる。これからの映像配信のやりかたである。

公民館の方がこれを見て、「ビデオ配信は難しいと思っていたが、これならできる」と認識していただいた。いいと思ってても技術が難しくはだめで、誰でも簡単にできるようにするのが課題。

参考URL 動画公開ブログ

http://blog.livedoor.jp/msemi2006/archives/cat_50062691.html

<http://www.mmdb.net/usr/mrepo/shiodawalk/page/A0001.html>

< SNSの展開 >

mixiがたちあがってSNSが広がっている。兵庫県で前からネットデーをやっている方が「ひよこむ」という地域SNSを立ち上げ、私も参加した。SNSのしかけを有効に使いたいと思っている。

大学でしかけている「地域メディア」としてSNSで地域に変化を起こそうという企画が進んでいる。地域に活動を広げるにはメディアがあるかどうかで決まると考えている。

< どのように地域メディアを作るかの課題 >

上田市とその周辺は人口20万のエリアで、そこに長野大学がある。CATVは地域メディアとしての可能性が高いので、この活用によりいろんなものがかけられそうである。大学では来年度から始まる新しい学部で地域連携のために地域メディアを立ち上げる。学生と住民がメディアを活用する仕組みを作る。

塩田平健康ウォーク、これはかなり簡単にできたが、公民館事業の活性化策としては、地域の様子がネットで見られるようになり、未来に残せば大切な地域の記録になる。

< ライブ映像のアーカイブ >

ポップコーンを使い、ライブカメラで撮った画像を自動で蓄積できる。現在、南房総のライブカメラで蓄積を協力している。国際城西大学のキャンパスから見ているが、一時間おきに夜中でも高感度で記録している。うまくいっている事例。

山形では数年間の記録をとっている例がある。田圃だったところが開発されコンビニがたち、変わっていく様子が記録できた。30分おきに記録している。日の出日の入りがかわっていく様子が記録されるので、一年分の日照の変化がわかる。学校教材になるだろう。

< 上田地域情報化プロジェクト >

これからの試みとして取り組みを計画している。上田市と企業、NPOで、大学がコーディネートするフレーム。社会的な広がりの中で、社会的な連携の仕掛けとして協議会を作る。Webラジオ、Webテレビなどが動く面白い。

組織作りでは、私も一年以上空回りしてきた。何事か始めようとおもったが一緒にやる方がいない。こういう問題の面白さの気づきに時間がかかる。まず人探しが最初の課題。

市民参加型ネット「やまがたネット」でうまくいったのは、2002年に始めた「楽しく協働学習」の公開講座で地域づくりをしたい方が集まった。その方々が主役になって、県がやっていた地域ポータル事業をNPOとして引き継いだ。他にも県の事業を受託する形で情報化を進めた。ポータルサイトの構築でいま自立している。山形県では行政は、相手が企業でなくても、きちっとやる方がいれば委託してくる。

参考 URL やまがたネット

<http://www.yamagata-net.jp/>

上田でやるのは振り出しからゼロから始めた。地域情報化プロジェクトには、大学とケーブルテレビが絡むとよいと思っている。CATVにサーバーを置かせてもらい、人的サポートもしていただけない。特に動画配信ではCATVは高速ネットにつながっているし、地域の情報基盤になっている。大学の情報学部の授業でも情報発信の実践に学生にやってもらおうしかけでキーステーションを作る。

まちなかの空き店舗をインターネット放送局にして住民が集える場にするのも一つのアイデア。実際のリアルな社会に入っていく。リアルなところに拠点を作っていく。市役所の空き店舗利用事業でケーブルテレビが使っているアンテナショップがある。そこも活用できるといい。

地域情報化には、その仕掛けをするリーダーの存在が欠かせない。市民活動をする人はたくさんいるが、インターネットまでの活用の発想が少ない。その方々を探すのが大変。

ITは一般にはオタク的なイメージがある。大学の中でも胡散臭く見られる。苦手の人が多い。

学校教育での情報化も重たい課題。学校での子供の自発的学習でのアーカイブ事例が非常に少ない。が、山形県の寒河江南部小学校では、実際のこどもの様子がネットで見られる。プッシュコロンを使って子供が和気あいあいと楽しくやっている。子供たちが情報発信の主役になっている。

寒河江の小学校の事例では、先生方もアクティブでみんな情報発信している。

小学生にもできることが大学生にできないわけがない。

参考URL 山形県寒河江市立南部小学校 学校生活から3千点以上のフォトアルバムを公開

<http://academic3.plala.or.jp/nanbu/>

福間尚生さんの報告

府中市生涯学習ボランティア「悠学の会」で活動。富士通をリタイア後、府中市生涯学習ボランティアとして、市民対象にエルネットの運営や楽しみながら学ぶIT講座などを教えている。

< 市民主導で学ぶ学習から生かす学習へ >

生涯学習センターでは、市民が主導して、学ぶ学習からみんなの能力を生かす学習へ変わってきた。エルネットでも、市民が学習コンテンツの情報発信するのに使っている。悠学の会ではビデオのオタクがいて、ことしから府中で映像記録の取り組みを始めた。府中のどんど焼きで、貴重な記録を残した

配付資料の中で「車返塞の神」は、ことしの生涯学習フェスティバルで放送した。これをやるについて、青年団の話聞いて「塞の神」のまとまった記録がないので、これを残しておけば、祭りがなくなっても後世に分かる。それで記録を残すことになった。

今後府中は律令時代に国府があったところで、古墳も出ているのでそういうものも記録に残していきたい。熊野神社が国宝になったが、そういうものを作っていきたい。

府中は市民が毎年6000人増えている。外から来た人が、府中はどういうまちかということを知ってもらいたい。

こうして作成した記録をどこで管理していくか、公開していくか、それが大きな課題になっている。

酒井美智子さんのコメント

日立製作所公共システム事業部

<地域への愛情を持つためのアーカイブ>

アーカイブでの取り組みでは、興味の分野はIT、アーカイブで地域がどうやって活性化するかに関心がある。

人口減少社会で少子化、高齢化が進み、都会でも高齢化が進んでいる。産業振興、「少子高齢化対策、防犯防災などあらゆる分野での情報発信、共有の重要性を痛感している。

全国での取り組みを見てきて、前川先生も言われたが、人間が主役であり、地域活動でそれをつなぐ手段としてのITに注目している。

その地域を知り、地域への愛情を持つことが重要。「塞の神」も民俗学の領域だが、イベントとして地域の方が知ることで愛情がはじまる。

長崎県の事例で、観光コースをつくるのに2時間2キロのコースでつくったが、その案内役で土地の方が土地のことを愛着をもって話す。それを聞いて、ここはいいとこだなぁと、また行きたくなる。これはどこでもできる取り組みだが、実際には、あるはずのものが伝えきれていない。

住民が知らなければ地域への愛着がでてこない。いかに伝えていくがアーカイブの役割となる。素晴らしいコンテンツをどうやって保存し、伝えていくかが、課題である。産学官での行政の取り組みが重要になっている。

参加者による意見交換

福間

前川先生の講習を受けて、学習情報アーカイブの試みを始めたが、市行政の理解がえられないものの、とりあえず始めてから半年くらいたつ。リーダーを集めるのが大変。ビデオで映像を撮る人はいるが、編集や原稿、ナレーションなどをするのがなかなか大変。映画のようにストーリーを作る、これも難しい。

あたらしい市民が、府中を知らないのを紹介するが、これもたいへん

どうやったらうまく行くのか、前川先生のeポートフォリオでは動画も入っているが、みなさんに知らせるのをどうやったらいいのか。



前川

福間さんはいい取り組みをされている。何が問題か、がんばりようがあるのか。

上田の地域情報化プロジェクトで考えていることは、地域の元気づくりということ。世の中が細分化されているが、地域社会の核は中小企業である。これががんばれば、世の中が変わると思う。

さらに学校と中小企業が変われば、地域が変わる。

中小企業向けのセミナーを大学でやったが、ほんとに困ったことは中小企業が新しい時代に脱皮

できないこと。IT抜きには脱皮できないのだが、情報化以前の問題として仕事の整理整頓ができない。体質改善が遅れている。それが細分化された弊害だが、これから何をするか、そのシナリオ。おたがいのものを共有すればみえてくる。

学校が情報発信して、学校が何をやっているかをネットに載せておくと子供のものの見方や学校の様子がよく分かってくる。

それからITが使えない層が大きくて、これも問題。

お年寄りからの伝承がとぎれているが、ITのアーカイブで世の中をつないでいくことができる。その年寄りの伝承を、例えば学校で生徒がやる。

中小企業の体質改善では、勝ち組になるには情報発信する。それが大事だが、そこでコンサル的な役割の人が、ITが必須でメディアと組み合わせてコンサルタントをする。体質改善の指導もする。企業が蘇生するうえでそれが重要な時期に来ている。

中沢

ひとりひとりがやるのがまず大事。自分の回りのことは自分がよく知っている。

ひとり代々での墓に入らない時代なので、自分の始末は自分でつけて、自分の一生をまとめる。

アーカイブで著作権の許諾をどうとるか、昔の資料ではこの作業が難しい。現状の死後50年の保護期間が70年に延長されると、さらに面倒になる。そのやりかたが標準化されていたり、写真、動画の作り方の規格ができていれば、やりやすい。

丸山

寒河江小ホームページでは、児童の顔写真を出しているが、珍しい例。

前川

保護者の許諾をとって公開している。プラス思考でやっている。学校の方針、校長が代われれば、また方針が変わるかもしれないが、教育委員会に理解のある人があると進みやすいことはある

中沢

肖像権は、確立しているわけではないが、調べたらプライバシー権として、本人が亡くなっても相続される。

前川

SNS的アーカイブがない。

地域全体の記録を残す仕掛けとして、自分はここのサービスを使ってブログを残し、昔の資料を残す。アーカイブを作成した方が亡くなったときに、共有の資産として使ってくださいと、意思表示しておく。アーカイブを、個人のものであるが、地域の資産として個人意志で残し、預けていく、そういう仕組みが重要。mmdb.netでそれを既に始めているが、これをはっきりと宣言して始めると「SNS的アーカイブ」になる。これからはこれを提唱していきたい。

小林

デジタルアーカイブのお寺をつくれればよい。お寺は、何百年も続き、運営が一貫して継承されている。(電腦山ストレー寺)

前川

ブログでも個人が残そうということはまだ意識されてないが、これからつくるSNSアーカイブは、未来永劫に記録するしかけを考えている。

小林

新教育基本法で、用語として地域に置き換え、郷土が復活した。疑問として、郷土が地域に結びつくのか。例えば私が、アメリカで郷土と問われると「郷土は日本」と答えるだろうが、日本に来ると「私は

山梨」と言う。山梨に来れば、「私は石和」と言う。

郷土資料をどう定義するか。法のなかで、その定義をしないまま法律がでてきた。ちょっと憤っている。

文学館では、郷土の作家といえば、そこで生まれた人が郷土作家。

行政が図書館では郷土資料といっているが、地域資料デジタル化研究会では、最初の山梨地域資料デジタル化研究会の名称から「山梨」をはずしたときに、ふるさとへの執着をせず、地域資料とした。

地域メディアでは自分たちの地域を大事にするという視点になる。

地域とは何か、郷土の意味合いを整理したい。

前川

それぞれの意志でそれぞれの地域のアーカイブが出来る。

霞ヶ浦では、茨城県の霞ヶ浦環境科学センターが地域のアーカイブセンターの役割を果たすべきだが、そうならない。社会科学系の研究で、地域資料、民俗・風俗や昔の社会がどうだったか、それを調べるのに、絵はがきなどのアーカイブが必要だったが、センターに博物館機能がないので、行政での対応は難しいということだった。NPO的な市民の有志がやるのが好ましいといわれた。

霞ヶ浦の研究機関でありながら、行政でというのは難しい。琵琶湖の博物館では、その取り組みをやっている。

酒井

単純に考えると、生まれ育ったところがふるさと、郷土。それ以外は地域。

丸山

生まれたところの「郷土」では、よそから来た住民には違和感があるだろう。

上田

福間さんの府中のDVDを見て、私は前に多摩ニュータウンにいたが、全然知らなかった。地域資料か、郷土資料かといえば、福間さんの資料は地域資料である。

小林

寺は地域社会の重要な拠点だといわれるが、実際には、この地域の人が少ない、地域外の人、都会地のひとが多くなっている。この寺では地域の人五分の一くらい。そうすると、郷土に根ざした活動が難しい。むしろ外に目を向けていく必要がある。

(以上)